様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２４０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０４４８４

研究課題名（和文）1930年代における綴方教育実践史の調査研究

研究課題名（英文）Research study on the history of practice of writing education in the 1930s

研究代表者
太郎良　信（Taroura, Shin）

文教大学・教育学部・教授

研究者番号：２０２３６７７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　綴方教育の歴史について、1910年代半ばからは、表現の「ありのまま」を推奨した『赤い鳥』綴方かあり、それを批判的に継承して、1930年代においては生活綴方が生まれ、1930年代半ば以降には綴方教育にととどまらず生活教育へと展開したとされてきた。
　そうした把握への再検討として、1920年代から1930年代において綴方教育の理論・実践の両面において活躍した木村文助（1882-1953）に着目して、木村を手がかりとして同時代の綴方教育の動向の把握をおこなった。研究作業の成果の一つとして、木村の未公刊手稿「綴方概論」の翻刻・校訂をおこない、冊子とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　木村文助の『村の綴り方』（厚生閣、1929年）は文芸綴方教育実践の書であった。そして、同時期の綴方教育実践に与えた衝撃も大きかった。ただ、それを模倣した綴方実践のなかには家庭生活などの秘密の「暴露」を促すものへと迷走してしまうものがあり、そうしたの危険のない「調べる綴方」へと方針転換をするものもあった。木村の文芸綴方論が再評価されるのは、1930年代半ばにおいて「調べる綴方」の問題点が表面化する時期のことであった。このように、木村の文芸綴方論と「調べる綴方」の流行とは、両立し得ないという点において関連かあるとみられることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：　Regarding the history of wriing education, there is a monthly magazine " AKAITORI"as is" of expression from the mid 1910s, and critically inheriting it, SEIKATSUTU TSUDURIKATA in the 1930s, and since the mid 1930s has been said to have expanded to not only writing education but also life education.
 As a reexamination of such understanding, we focused on Bunsuke KIMURA (1882-1953), who was active in both the theory and practice of writing education in the 1920s and 1930s. I grasped. As one of the achievements of the research work, the unpublished manuscript "TSUDURIKATA-GAIRON "" by KIMURA was reprinted and revised into a booklet.

研究分野：教育学、教育史

キーワード：綴方　文芸綴方　実用綴方　木村文助　鈴木三重吉　生活綴方　生活教育　『赤い鳥』

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1910 年代から 1930 年代における綴方教育の新しい動向に関して、1910 年代後半から 1920 年代にかけては『赤い鳥』綴方、1920 年代末から 1930 年代半ばまでは生活綴方、1930 年代後半には生活教育の一環としての綴方というようにとらえられることが多かった。しかし、子どもの生活を重視することを画期として区分されたはずの生活綴方の時期においても 1930 年代初頭には、調べることに重きをおいた「調べる綴方」が生まれた。それは、異常なほどの流行現象を示し、「調べる綴方」関連の単行本や雑誌の臨時増刊号や特集号が発行されることとなった。しかし、そこで書かれる綴方は文章表現としては未熟なものが多かった。また、それ以前に、「調べる綴方」は、子どもにとっても、教師にとっても、魅力の乏しいものであった。そうした「調べる綴方」が、なぜ生まれて、数年間にわたって流行現象を呈したかということについての批判的な検証はなされぬままである。ただし、同時代においても、「調べる綴方」に対する批判もなされてはいた。また、1930 年代半ばには、『赤い鳥』綴方の再評価の必要性の指摘も出されていた。しかし、ただ、『赤い鳥』綴方の再評価とは言っても、『赤い鳥』主宰者・鈴木三重吉の綴方論でや『赤い鳥』に掲載される綴方一般のことではない。前期『赤い鳥』（1918 年 7 月号から 929 年 3 月号）に数多くの指導作品を入選させた木村文助（1882-1953）の文芸綴方論とその指導作品であった。1920 年代末から 1930 年代における、「調べる綴方」の流行とその問題点、「調べる綴方」と木村文助の文芸教育論との関係などを解明することが、1930 年代の綴方教育実践史にとって課題となっていた。

２．研究の目的

1930 年代の綴方教育実践史を明らかにすることである。当然のことながら、それよりも前の『赤い鳥』綴方の時代、つまり、1910 年代・1920 年代との関係を抜きにすることはできないため、1910 年代・1920 年代における綴方教育実践についても視野に入れていく。その際、一人の人物に焦点をあてて、その人物を軸にしてみていく。具体的には、木村文助の綴方教育実践とそれに伴う理論活動を明らかにしていく。

３．研究の方法

従来、『赤い鳥』綴方の特徴としてとらえられてきたことは、文章表現における「ありのまま」であった。これは、主宰者・鈴木三重吉の綴方観であるが、三重吉が子どもに接する教師とは立場が異なるため、綴方に書かれた子どもの生活や行動等に対して批評をしないということによることでもあった。しかし、『赤い鳥』に綴方を投稿するのは、子どもが直接に編集部に送る場合もあったであろうが、多くは、教師の手によるものであった。したがって、子どもに接する機会のない三重吉と、子どもとのかかわりを持っている教師との間において、綴方観が異なる場合がある。つまり、『赤い鳥』綴方といっても、三重吉の綴方観に即した綴方を指すのか、『赤い鳥』に掲載された綴方全般を指すのかということの区別すらされてはこなかった。

前期『赤い鳥』においてもっとも多くの入選者を出した木村文助の場合、その綴方教育実践の原型は、『赤い鳥』創刊に先立つ時期にあったものとみられる。そして、『赤い鳥』が創刊されたのちも、数年間は、木村は『赤い鳥』に関心を向けてはいなかった。創刊から 4 年を経た 1922 年になって木村は『赤い鳥』に接し、そこで綴方の投稿を始めるのである。つまり、木村は、『赤い鳥』綴方に影響を受けて綴方教育をおこなったのではなく、綴方教育の成果としての綴方を投稿したのである。そして、それらの綴方が『赤い鳥』に掲載されることによって、自らの綴方教育に確信をもつこととなった。しかし、木村の指導した綴方が三重吉に評価されたからといって、三重吉と木村の綴方教育観が同じというわけではない。さらには、1930 年頃、木村は三重吉に「破門」されたということになっている。つまり、木村の綴方教育は、その教師生活の一時期において『赤い鳥』と同一歩調をとっているが、その前後の時期にも綴方教育実践があるということである。

従来の研究において、木村は、『赤い鳥』綴方から生活綴方への「かけ橋」（滑川道夫）の役割を果たしたという評価があたえられてきた。1920 年代から 1930 年代への時期にあって、綴方の発表の場や論稿執筆の場が、雑誌『赤い鳥』から生活綴方を推進した雑誌『綴方生活』や雑誌『北方教育』等へと移行していることは事実であるが、それだけでは木村の綴方論の評価にならない。ただ、「かけ橋」と評されるように、『赤い鳥』綴方と生活綴方の双方に積極的に関与したとは事実であるから、木村の綴方教育実践がどのように推移しているのかを検討して行くことは有効な方法とみられる。

その際の方法として次の様なことが挙げられた。

１）木村文助の著作論文等の収集・整理

木村には、著書として『村の綴り方』（厚生閣、1929 年）、『悩みの修身』（厚生閣、1932 年）がある。また、綴方文集として『綴方生活　村の子供』（文園社、1927 年）『村落児童文選』（文園社、1930 年）がある。その他に、共著もあるが、雑誌論文等は整理されてはいない。とりわけ、1910 年代、1920 年代の雑誌論文等の収集・整理が必要であった。

２）木村文助の経歴の整理

木村は、教師生活の前半は秋田県の小学校の訓導、訓導校長であった。後半は、北海道の小学校の訓導兼校長であった。北海道時代の小学校訓導兼校長については判明しているが、秋田県時代については勤務校や勤務期間についてすべてが明らかになっているわけではなく、秋田県か

ら北海道へ渡る事情や、渡った直後の函館師範学校における職種など、経歴の全体像の整理が求められた。北海道に渡ることとなる理由は家族の起こした不祥事に起因するものであったこと、そのためか秋田での最後の勤務校となった前田尋常高等小学校における綴方教育実践ついては、同校におけるものと容易に判明する形では残してはいないことも確認された。あわせて、経歴等が明らかになることによって、綴方の内容から判断して、前田校における綴方作品であること判明したものもあった。

３）匿名で発表された綴方の作者の確認

木村の綴方教育を代表する綴方の一つに、高等科二年女子の「涙」がある。これは、木村が『赤い鳥』綴方に出会う前に生まれていたものであり、木村が求めていた綴方でもあった。内容は、父と継母にたいする不満を綴ったものであり、匿名で『綴方生活　村の子供』（前出）や『村の綴り方』（前出）等に掲載されていた。そのため、「涙」は木村の綴方教育においては重要な位置にあるにもかかわらず、書かれた時期すら確定できないものとなっていた。謄写刷の『綴方生活村の子供』（1924 年）を確認したところ、「涙」について目次では匿名とされていたものの、本文では作者名を書いたうえで三本の線で消してあり、実際には作者名がわかる形で印刷されていた。また、綴方のなかに作者の名前が呼ばれる場面が３回あるが、作者の下の名前と一致していた。のことにより、「涙」の作者の名前が判明し、卒業生名簿と対照して、作者が高等科２年であったのは 1921 年であったことが明らかとなった。

４）木村文助の手稿〚綴方概論〛の翻刻・校訂

木村は、1939 年に出版を想定した手稿『綴方概論』を脱稿していた。出版社に持ち込んだこともあっというが、出版はかなわず、その後も原稿の加筆修正を重ねていたと言われる。木村の没後、木村が晩年を過ごした北海道茅部郡森町図書館に寄贈された。その現物は非公開であり、小さな写真による閲覧のみが可能である。その内容は、1910 年代から 1930 年代までの綴方教育の動向を踏まえつつ、木村の綴方教育論を展開したものである。木村の指導した綴方ばかりでなく、他の教師が指導した綴方をも取り上げており、木村の目からみた綴方教育史ともいえるものである。手稿そのものは、いったん脱稿したものに加筆修正を加えつつあったためか、綴方文例の脱落があったり、原稿番号が前後していたり、末尾は散逸していたりして、そのままでは通読できる状況にはない。また、手稿の文字が判読しづらい。この手稿を読み解くには、脱落した綴方文例を収集したり、引用文献の原文と照合したり、雑誌論文に加筆して原稿としたものは初出時のものを確認するなどの研究としての手続きが求められた。いったん脱稿したものを加筆修正を重ねているうちに不完全な形となっているため、1939 年に脱稿した際の姿に戻すことを追求した。

４．研究成果

木村文助は、1918 年から訓導兼校長として勤務した北海道亀田郡大野尋常小学校で、綴方教育実践のありようを模索した。そのなかで、前述したように 1921 年度に高等科 2 年女子の綴方「涙」を得た。「涙」は自らの綴方教育の方向を具現化したものと見た。1922 年頃、偶然『赤い鳥』（1918 年 7 月創刊）を手にすることとなり、指導作品を投稿してみた。すると、『赤い鳥』1922 年 8 月号に掲載され、それ以降も、木村の指導した綴方が毎月のように『赤い鳥』に掲載されることとなった。

木村は、大野校の綴方を謄写刷りの文集『綴方生活　村の子供』（私家版、1924 年）『村の子供』第２集（私家版、1925 年）発行したのち、それらを再編集した文集『綴方生活　村の子供』（文園社、1927 年）を出版した。また、木村は論文「綴方二十年」『国語と人生』第 8 号～第９号、1926 年）や「綴方二十年」（『綴方教育』1928 年 7 月号・9 月号・10 月号）などをもとに著書『村の綴り方』（厚生閣、1929 年）を出版した。これは、『赤い鳥』主宰者・鈴木三重吉が終始する表現における「ありのまま」にとどまらず、作者にとって価値のあることを求めるものであった。つまり、綴ることで自己形成につながることを目ざしたのであり、それを木村は「文芸的的綴方」（「文芸綴方」とも表記した）と称した。前述の「涙」も、『綴方生活　村の子供』に収録され、『村の綴り方』においても全文を引用して論じられていた。

『綴方生活　村の子供』や『村の綴り方』の反響は大きかったとみられる。長崎県の教員の近藤益雄は、受けた「衝撃」について次のように記している。「私の行詰に対して強い衝撃を与へたものは、前に掲げた木村文助先生の『村の綴り方』とその指導文集である『村の子供』であつた。私は唯驚いた、恐怖をさへ感じた。そしてそれまでの私の綴方営為を一日も早く清算してしまはねばならぬ焦燥を感じた」（近藤益雄「作品処理に関する覚え書」木下龍二編『作品文・詩の処理に関する研究』東宛書房、1935 年、p.364）そして、近藤は、木村の綴方教育の模倣を試みたものとみられる。その結果、近藤の指導によって「家庭内におこる様々な暗い現実を歎く子供も出て来た。財産整理、父と叔父との抗争、家族の病気、等々、さういふ暗い事実が、私の視野に浮き出して来た」（同前）という。そうした内容の綴方が書かれ始めたということである。そのような綴方について、近藤は「生活をありのままに暴露した綴方ではあつた」が「子供への同情と共感とはあつても、その問題の由つて来たるところも、亦それを如何に生活的に統制すべきか指導することも私には出来なかつた」（同前、p.365）と述べて、書かれた綴方が「暴露」てあり、そうしたものに対応ができなかったとしている。その後、近藤は、「調べる綴方」に指導の方針を変える。1933 年に近藤は、綴方教育の動向について「過去の文芸至上の綴方から科学的実用的綴方へ――綴方は拡充し転向し建て直されてゆきつゝある」（『綴方教育』1933 年 1 月

号、p.89）と「文芸綴方」を過去のものとしてる。しかし、近藤にとっても「「調べる綴方」の作品は「どうも迫力に乏しく、個性が全然表れない、至極退屈なものであつた。然し前の生活バクロの綴り方と異って、ここには秘密を要するやうな問題がなかつたので、作品処理の仕事も、共同で統制的に行ふことが出来た」（同前、p.368）という。このように、近藤は「暴露」「バクロ」という表現を用いて、かつての自らが指導した綴方を否定している。綴方に書かれた生活事実に内容に即して指導をこのようにみてくると、近藤は、いったんは木村の「文芸的綴方」に衝撃をうけたものの、木村の「文芸的綴方」は、近藤にとっては「暴露」の綴方がうまれることとなったということで、「調べる綴方」の実践へとにであったという。「調べる綴方」の実践がなぜ流行現象を呈することとなったのかについては未詳の部分が多いが、近藤のように、綴方の内容への指導で悩む必要はなく、調べ方の指導に集中できるということが要因であったのかもしれない。

もちろん、木村の文芸綴方論に影響をうけたと自任する実践もあった。秋田県の鈴木正之『鉛筆の跡を辿りて』（北方教育社、1930 年）や秋田県の高橋忠一『夏みかん』（文園社、1935）年等である。ただ、鈴木の実践は、酒乱の父を書いたものなど、近藤のいう「暴露」のものがあり、綴方評をした滑川道夫き「事象としての人物の心境は出てゐるが、それに対する作者の内省、批判が足りない…。敢へて云へば、指導の欠陥である」（鈴木、前出書、p.84 より再引用）という指摘がなされていた。また、高橋の『夏みかん』に言及した際にそり指導作品が「正直に書いた」ものであることは評価しつつ、教師の姿勢として「単に受容肯定の消極止まるのみであるならば、建設的、構築的とはいひ得まい」と批判している（木村文助「赤い鳥綴方雑感」『綴方生活』1935 年 12 月号、p.11）。

木村の文芸綴方論は、受け止める側からみれば、家庭内等の秘密を暴露することを促すものと見られた面があったようである。そして、そうした問題に触れずにすむ「調べる綴方」は教師にとっても子どもにとっても魅力のないものであり、「文芸綴方論」が再評価の対象となりつつあったということである。

こうしてみると、1930 年代初頭において、木村の文芸綴方論がどのように評価されていたかが再検討されなければならない。換言すれば、木村の文芸綴方論は、実際には、あまり理解されぬままだったのではないか、ということである。「文芸綴方」という用語や文学史でいえば過去のものとなっていた「自然主義」を想起させるものであり、「文芸主義から科学主義へ」という時代のなかで、時代にそぐわないものと見られたのではないか。また、冨原義徳の『土の綴り方』（厚生閣、1928 年）のあとに出されたこともあって、内容を不問にして単に農村の綴方教育の綴方教育の実践記録としての「評価」もあった。また、事実や作者の思いを詳しく書かせてはいるが、そこから生まれて来るはずの今後のことが書かれていないという批判があったことも確かである。

木村は、1939 年に手稿『綴方概論』をまとめていた。これは、木村の文芸教育論への批判や誤解を念頭に置きつつ、自らの文芸綴方論を体系的に論じたものである。そのようなものであることから、その全貌を把握するために、本研究の一環として、その手稿の翻刻・校訂を進めた。同手稿をもとに、あらためて木村の文芸教育論の全体像を明らかにすることがもとめられている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計15件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 太郎良　信	４．巻 52
２．論文標題 木村文助における綴方教育の模索と展開	５．発行年 2018年
３．雑誌名 文教大学教育学部紀要	６．最初と最後の頁 139-152
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 太郎良 信	４．巻 １０巻２号
２．論文標題 木村文助と鈴木三重吉の綴方教育論の異同の検討	５．発行年 2018年
３．雑誌名 教育研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 13-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 太郎良 信	４．巻 11巻1号
２．論文標題 木村文助の綴方教育論における意欲	５．発行年 2018年
３．雑誌名 教育研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 9-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 太郎良 信	４．巻 52集別集
２．論文標題 家庭環境の福祉的ケアと教員の職務― 1930年代の事例をもとに	５．発行年 2019年
３．雑誌名 文教大学教育学部紀要	６．最初と最後の頁 119-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 太郎良 信	４．巻 第51集
２．論文標題 木村文助の綴方教育論の研究（1）－手稿『綴方概論』の検討－	５．発行年 2017年
３．雑誌名 文教大学教育学部紀要	６．最初と最後の頁 307-318
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 太郎良　信	４．巻 １０巻１号
２．論文標題 鈴木正之の綴方教育の検討－『鉛筆の跡を辿りて』に即して－	５．発行年 2017年
３．雑誌名 教育研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 31-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 太郎良 信	４．巻 １０巻２号
２．論文標題 木村文助と鈴木三重吉の綴方教育論の異同の検討	５．発行年 2018年
３．雑誌名 教育研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 太郎良 信	４．巻 22号
２．論文標題 『小砂丘忠義教育論集』の残した課題などについて	５．発行年 2017年
３．雑誌名 土佐綴方茶話	６．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 太郎良　信	４．巻 ９巻２号
２．論文標題 １９３７年における国分一太郎の教壇復帰状況の検証	５．発行年 2017年
３．雑誌名 教育研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 49-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 太郎良　信	４．巻 21号
２．論文標題 小砂丘忠義の修学旅行日誌	５．発行年 2016年
３．雑誌名 土佐綴方茶話	６．最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 太郎良　信	４．巻 ９巻１号
２．論文標題 １９３０年代における木村文助の綴方教育論の検討	５．発行年 2016年
３．雑誌名 教育研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 29-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 太郎良　信	４．巻 53
２．論文標題 1910年代にける木村文助の綴方教育の検討	５．発行年 2019年
３．雑誌名 文教大学教育学部紀要	６．最初と最後の頁 57-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 太郎良信	4．巻 12巻1号
2．論文標題 小説家による綴方への加筆修正問題の検討	5．発行年 2019年
3．雑誌名 教育研究ジャーナル	6．最初と最後の頁 5-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 太郎良信	4．巻 23
2．論文標題 小砂丘忠義と生活綴方	5．発行年 2018年
3．雑誌名 土佐綴方茶話	6．最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 太郎良信	4．巻 24
2．論文標題 「綴り方生活」という成語のルーツを考える	5．発行年 2019年
3．雑誌名 土佐綴方茶話	6．最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 太郎良 信
2．発表標題 木村文助の綴方教育論の検討
3．学会等名 日本作文の会 第67回作文教育研究大会
4．発表年 2018年

１．発表者名 太郎良　信
２．発表標題 木村文助の綴方教育論の検討
３．学会等名 全国大学国語教育学会第１３３回福山大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 出雲俊江、小川俊輔、木本一成、太郎良信、ほか	４．発行年 2018年
２．出版社 柏書房	５．総ページ数 663
３．書名 赤い鳥事典	

１．著者名 太郎良信	４．発行年 2020年
２．出版社 太郎良信	５．総ページ数 316
３．書名 翻刻・校訂　木村文助著「綴方概論」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考